

『茶経』巻中「四之器、盃」と邢州窯白磁

— 南方人陸羽のアイデンティティと茶の色映りに関する一見解 —
付論・茶神に注いだもの

田中美佐

抄録

『茶経』巻中「四之器、盃(茶碗)」では、陸羽が越州窯を優位に置いたため、邢州窯との評価の差が歴然としている。私は拙稿・自著において、この評価の差が生じた理由は、陸羽の南方人としてのアイデンティティに拠るところが大きいとした。今回の論考では、昨今の研究者の成果も併せながら、自身の研究の整理・補足を行い、改めて自説に導いた。また、陸羽が越州窯を好んだことから、邢州窯に茶を入れると赤色系統(「丹」・「紅」)に映ると言うが、私は、陸羽の磁器に対する好み、『茶経』巻下「五之煮」に記された茶の色、そして『茶経』の文の特徴などからそれを説明した。付論では、陸羽人形が「茶神」として扱われていたことや茶の利益があらがない時に入りに釜の湯を注いで拝んだのではないかという点について言及した。

キーワード

陸羽、『茶経』、盃、邢州窯、越州窯、南方人、アイデンティティ、茶の色、茶神

目次

はじめに

第一章 『茶経』巻中「四之器、盃(茶碗)」に記された越州窯・邢州窯の評価と概況

第二章 『茶経』巻中「四之器、盃(茶碗)」と南方人陸羽のアイデンティティ

第三章 『茶経』巻中「四之器、盃(茶碗)」に記された茶の色映りに関する一見解

付論 茶神に注いだもの

おわりに

Lu Yu (陸羽)'s Sense of Identification with Southern China and His Description of Tea Color in Chapter 4 of *Chajing* (『茶経』)

-- With an Appendix: What was poured over small figures of Lu Yu ?

Tanaka, Misa

Abstract

In "Chapter 4 : Tea Bowls and Utensils" of his 8th-century essay *Chajing*, Lu Yu places a higher value on the pottery made in Yuezhou (Yuezhou yao, 越州窯) than on the pottery of Xingzhou (Xingzhou yao, 邢州窯). In previous studies, I suggested that Lu Yu's high evaluation of Yuezhou yao derives from his sense of identification with Southern China, the homeland of himself and of Yuezhou yao. In the present article I elaborate on this topic, referring to recent articles by other researchers. Lu Yu prefers Yuezhou yao to Xingzhou yao, and he claims that when one pours tea into a bowl of Xingzhou white porcelain, the color of the tea looks red. I give my own interpretation of this description with special reference to Lu Yu's taste in porcelain and tea color, as discussed in "Chapter 4" and "Chapter 5 : Tea-boiling" of *Chajing*. In the appendix I point to evidence that in some parts of China in later times, small figures of Lu Yu were worshipped as the Tea God, and people poured hot water over them as a religious practice.

Key Words

Lu yu, *Chajin*, tea bowls, Xingzhou yao, Yuezhou yao, Southern Chinese, sense of identification, tea color, Tea God

近畿大学短期大学部教授
2014年9月30日受理

はじめに

『茶経』は中国最初の茶書である。執筆以来、一二〇〇年以上に亘って読み継がれ、古典としての地位を確立している。本稿では、従来から指摘されている『茶経』巻中「四之器、盃(茶碗)」に見える問題点について検討したい。この「四之器、盃(茶碗)」には、陸羽の主観がかなり入っており、そのため、判読が難しい。まず、問題点の一つとして挙げられるのは、「四之器、盃(茶碗)」で記される越州窯と邢州窯の評価の差に関するものである。これに関しては、以前に拙稿「陸羽『茶経』にみえる南方意識とその優位性」^①・自著『喫茶文化史研究序説』^②においても考察を行っている。今回は第一・二章において、昨今の研究者の成果も併せながら、自身の研究の整理・補足を行い、改めて自説に導いた。また、別の問題点として挙げられるのは、「四之器、盃(茶碗)」で記される茶の色映りに関するものである。第三章では、従来とは別の観点から考察した茶の色映りに関する解釈を試みたい。さらに、今回は付論を設けた。

まず、第一・二章の概括をする。陸羽は『茶経』巻中「四之器、盃(茶碗)」において、越州窯青磁を第一とみなして高く評価したが、邢州窯白磁に関しては、殊のほか、その評価が低い。しかしながら、近年の陶磁器関連の研究(『邢台隋代邢窯』^③・『千年邢窯』^④)などからも、邢州窯は唐代において、越州窯と並び立つ名窯であったことは明らかである。また、「優雅なる白い焼き物—定窯白磁をめぐる諸問題」^⑤など、昨今の研究においては、『茶経』巻中「四之器、盃(茶碗)」に記された越州窯と邢州窯の優劣に関して、「四之器、盃(茶碗)」の記述そのままをよしとせず、陸羽の記述にいたずらに流されることなく、邢州窯の真価が述べてられている。今後は、このような陶磁器分野の研究者の業績に刺激を受け、歴史分野の「四之器、盃(茶碗)」に関する研究も進展して行くと思われる。本稿の位置付けもまさにこ

の点にあり、自説を前提においた上ではあるが、「四之器、盃(茶碗)」において越州窯と邢州窯の評価の差が生じた理由について、陶磁器分野・文学分野の研究成果を鑑みながら、改めて検討を加えたい。

次に、第三章の概括をする。『茶経』巻中「四之器、盃(茶碗)」では、越州窯青磁・邢州窯白磁の茶の色映りにについても論じられている。しかしながら、従来の研究では、注いだ茶の色の考察が十分でないため、的確な解釈がなされていないと感じる。そこで、『茶経』巻下「五之煮」から陸羽が良しとする茶とそれを煮だした際の色を探り、『茶経』の文の特徴やそこから推測される陸羽の意識を把握した上で、それらを「四之器、盃(茶碗)」の文に照らし合わせて、解釈上の問題点の解決を試みた。

付論に関しては概括とまではいかないが、その内容を述べたい。最近、陸羽の茶神に関する問題に対して若干の知見を得たため、本論と直接には関係しないが、付論を設けた。拙稿「喫茶の起源と茶の流通に関する一考察」^⑥や『喫茶文化史研究序説』において、唐代の商家では陸羽の人形が茶神として祭られたのではないかと推察し、茶の利益があらぬ時に人形に何かを注いで拜んだことを述べた。今回は、その茶神説や人形に注いだものに関しての補足を行いたい。

第一章 『茶経』巻中「四之器、盃(茶碗)」に記された越州窯・邢州窯の評価と概況

第一章では、まず、『茶経』巻中「四之器、盃(茶碗)」に記された越州窯と邢州窯の評価の差を考察するための基礎的な作業を行いたい。そこで、発掘報告に基づいた論文・著述や基本的な文献史料を用いて、当時の窯場や生産品の状況、またそれら生産品に対する世間の関心などについての概略的な考察を行うことにする。最初に本稿の検討課題である『茶経』巻中「四之器、

盃(茶碗)」を挙げる。

盃、越州上。鼎州次。婺州次。壽州洪州次。或者以邢州處越州上、殊爲不然。若邢瓷類銀、越瓷類玉。邢不如越一也。若邢瓷類雪、則越瓷類水。邢不如越二也。邢瓷白而茶色丹。越瓷青而茶色綠。邢不如越三也。晉杜毓辨賦所謂、器擇陶揀、出自東甌。甌越也。甌、越州上。口唇不卷、底卷而淺、受半升已下。越州瓷、岳瓷皆青。青則益茶、茶作綠(筆者注:この「綠」については、「白紅」とは記さない。注⑧参照)之色。邢州瓷白、茶色紅。壽州瓷黃、茶色紫。洪州瓷褐、茶色黑。悉不宜茶^⑧。

以上が、「四之器、盃(茶碗)」の全文である。まず、「盃、越州上。鼎州次。婺州次。岳州次。壽州洪州次(盃は越州が上品である。鼎州が次品。婺州が次品。岳州が次品。壽州・洪州が次品。)」とあって、越州窯を筆頭として諸窯場の茶碗の順位付けを行うことから始めている。続いて「或者以邢州處越州上、殊爲不然(または、邢州を越州の上におくが決してそうではない)」とあって、この文から推し量れば、陸羽は越州窯に対して邢州窯をかなり意識して扱っていたのではないかと思われる。それと同時に、この文からは、世間の評価は逆に邢州窯を上置く場合があったのではないかとも推測される。また、以下の後続の文「若邢瓷類銀、越瓷類玉。邢不如越一也。若邢瓷類雪、則越瓷類水。邢不如越二也。邢瓷白而茶色丹。越瓷青而茶色綠。邢不如越三也(もし邢州の磁器が銀に似ているとするならば、越州の磁器は玉に似ている。邢州の磁器が越州のものに及ばない第一の理由である。もし邢州の磁器が雪に似ているとするならば、越州の磁器は、氷に似ている。邢州の磁器が越州のものに及ばない第二の理由である。邢州の磁器は白いので茶の色は丹く映る。越州の磁器は青いので茶の色は緑に映る。邢州の磁器が越州のものに及ばない第三の理由である)・「越州瓷、岳瓷皆青。青則益茶、茶

作緑之色。邢州瓷白、茶色紅(越州の磁器、岳州の磁器はみな青い。青ければ茶の色が映えて、茶は緑色になる。邢州の磁器は白いので、茶の色は赤く映る)」も併せて考えると、陸羽は文章中で越州窯と邢州窯とを対峙させており、この両窯が「四之器、盃(茶碗)」の主軸であることがわかる。しかし、ここで押さえておきたいことは、陸羽は「四之器、盃(茶碗)」において、決して越州窯と邢州窯とを対等には記していない点である。

そこで、次に越州窯と邢州窯についての概観を見ていきたい。最初に越州窯について述べれば、この窯場は浙江省を中心に展開した窯場である。漢代に焼成がはじまり、三国・両晋をへて宋代に至るまで開窯した。越州窯の最盛期は唐後期から、五代、北宋前期であって、唐宋時代の越州窯の中心は、浙江省上虞市の窯寺前・張子山窯、紹興市と慈溪市の上林湖窯である^⑨。端正な器形に淡く澄んだ蓬色の釉薬がかけられた美しい青磁は、「秘色」の名で古来数多くの文献に称えられている^⑩。一方の邢州窯は、近年調査が本格化してきている。主として河北省臨城縣・内丘縣などに窯址跡がある。邢州窯は北朝に焼成を開始し、隋代、初唐の発展をへて、盛唐に至って最盛期を迎え、唐末五代には衰微に向かった。邢州窯は良質の精緻な白磁を焼成して代表的産品とし、隋唐時期における北方の重要な窯場の一つとなった^⑪。邢州窯白磁の焼成の成功は、商(殷)周以来の青磁が天下を統一していた局面を終わらせ、中国陶磁史上、「南青北白」という華やかな競い合いの二大体系を形成したのである^⑫。

このように、発掘報告に基づいた著述・文献と「四之器、盃(茶碗)」とを併せ見れば、「四之器、盃(茶碗)」の記述の背景には、越州窯と邢州窯を頂点とした「南青北白」と称される、当時の青磁・白磁がしのぎをけずっていた華やかな状況があったことが理解される^⑬。しかしながら、世間では青磁・白磁がともに並び立つ状況下にあっても、「四之器、盃(茶碗)」の記述では、青磁の代表格である越州窯のみが優位に立って記されている。なぜ、

そのように記されるのだろうか。そこで、越州窯と邢州窯について、もう少し見ていくことにしたい。

越州窯に関して言えば、越州窯の発掘報告や唐の皇帝である懿宗、僖宗が寄進した法門寺の出土品から判断しても、越州窯の品質が高かったことは明らかである。さらに、晩唐期の皮日休（「茶圃」、第二章で解説）や陸龜蒙（「秘色越器」・「施肩吾（蜀茗詩）」）らによって、越州窯やその茶碗に関して詩文においても記されており、文人による評価も高い。以上から、越州窯青磁が、天下の逸品であったことは明らかである。しかしながら、前掲の陶磁器分野の研究からみても、一方の邢州窯白磁も当時の一級品であったことは否めない。そこで、次に邢州窯についてさらに考察することにした。

まず、邢州窯が貢納品であったことを窺わせる記述がある。『新唐書』巻三十九 志第二十九 地理三には次のように見える。

邢州鉅鹿郡、上。本襄國郡、天寶元年更名、土貢：絲布、磁器、刀、文石⁴⁹。

『新唐書』には、「邢州鉅鹿郡」とある。唐代、邢州は鉅鹿郡であった時期⁵⁰があり、土貢の品に「磁器」とあることから、邢州窯の生産品が宮廷に貢納されたことを記していると思われる。前掲の発掘報告等から、当時、邢州窯の品質が高かったことは理解されたが、そのため宮廷へ貢納されたのであろう。そこで、実際に当時の人々が邢州窯をどのように認識していたかについて考察したい。開元（七一三〜四一年）から長慶（八二一〜二四年）間の逸事を載せる唐の李肇『唐国史補』巻之下には、次のように記される。

凡貨賄之物、侈于用者不可勝紀。絲布爲衣、麻布爲囊、氈帽爲蓋、革皮

爲帶、内邱白瓷甌、端溪紫石硯、天下無貴賤通用之⁵¹。

『唐国史補』には、贈り物（賄賂として）の数々が載る。そこには絹でつくった衣装、麻布でつくったかばん、フェルトでつくった蓋^{かき}、革でつくったベルト、内丘の白磁甌、端溪の紫石硯が挙げられている。いずれも贅沢品である。この中に記される内丘の白磁甌とは、内丘県に窯址跡のある邢州窯の生産品を指していると思われる。このように『唐国史補』において、邢州窯の白磁甌が贅沢品の中に名を連ねていることから、文献からも当時の邢州窯は、高級品を生産する窯場であったことが理解される。すなわち、陸羽によって『茶経』が記された当時、邢州窯は最盛期にちかく、世間での邢州窯の評価も相当高かったことが『唐国史補』の記述からは想像できる。しかしながら、前掲文「四之器、盃（茶碗）」では、「或者以邢州處越州上、殊爲不然。」とあったことから見ても、やはり、「四之器、盃（茶碗）」の記述には陸羽の何がしかの思惑があったと思われる。

以上より、陸羽は「四之器、盃（茶碗）」において、世間とは異なる評価を邢州窯に下していたことがわかる。すなわち、邢州窯は陸羽によってかなり低く評価されていたと考えられる。さらに言及したい点は、右に挙げた『唐国史補』の記述の中に越州窯が見られなかったことである。この点も一応留意しておきたい。

第二章 『茶経』巻中「四之器、盃（茶碗）」と南方人陸羽のアイデンティティ

第一章では、邢州窯が陸羽によってかなり低く評価されていたことが明らかとなった。「陸羽『茶経』にみえる南方意識とその優位性」や『喫茶文化史研究序説』では、その理由について考察した。本章では、拙稿や自著では扱わなかった詩僧や文人の詩文を引用し、昨今の研究者の成果も併せながら、

改めて自身の研究の整理・補足をを行い、自説に導きたい。

まず、陸羽と親しく交わっていた中唐の詩僧の寂皎然（七二〇～九八）の詩から見ていきたい。皎然が湖州に生まれ、天寶七載（七四八）に受戒する。陸羽との交流を結んだのは至徳元年（七五六）で、この頃から、おおむね湖州に定住し、僧侶や官人など、文化人と交流した¹⁰⁾。皎然の「飲茶歌詠崔石使君」には、次のように見える。

越人遺我剡溪（一作山）茗、採得金鑿金鼎。

素瓷雪色縹（一作飄）沫香、何似諸山瓊蕊漿。

一飲條昏寐、情来（一作思）朗爽（一作爽朗）滿天地。

再飲清我神、忽如飛雨灑輕塵

三飲便得道、何須苦心破煩惱。

此物清高世莫知、世人飲酒多（一作徒）自欺。

愁（一作好）看畢卓甕間夜、笑向陶潛籬下時。

崔侯啜之意不已、狂歌一曲驚人耳。

孰知茶道全爾真、唯有丹丘得如此¹¹⁾。

「飲茶歌詠崔石使君」で記された「素瓷雪色」とは、白磁の茶碗¹²⁾のことである。この茶碗が邢州窯のものかどうかについては、右の詩文からだけでは判断できない。しかしながら、高橋忠彦氏は「寂皎然の茶詩」において、陸羽の『茶経』と皎然の茶詩とのかかわりについて大変興味深い考察をなさっている。次にそれを挙げる。

「素瓷雪色」は、『茶経』四之器で、邢州の白磁について「邢州類雪」と述べるのと暗合する。と同時に、『茶経』が越瓷を上とするのと判断基準が違うようにも見える¹³⁾。

すなわち、高橋氏は「素瓷雪色」と「四之器、盃（茶碗）」に記された「邢州類雪」との関連性を見出されている。高橋氏は「寂皎然の茶詩」の中で、皎然の詩中の描写で『茶経』と符合するものをいくつか列挙されており、その一つがこの「素瓷雪色」であると述べられる。このように皎然の茶詩には邢州窯白磁を予感させる記述があるのだが、陸羽が高く評価していた越州窯青磁に関するものは見当たらない。高橋氏が『茶経』が越瓷を上とするのと判断基準が違うようにも見える」とおっしゃるのも確かにうなずける。

さらに、他の皎然関連の詩も見ていきたい。皎然の聯句「五言月夜啜茶聯句」には、次のように見える。

真卿、陸士修、張薦、李萼、崔万、昼

泛花邀坐客、代飲引情言。 士修

醒酒宜華席、留僧想獨園。 薦

不須攀月桂、何似樹庭萱。 萼

御史秋風勁、尚書北斗尊。 万

流華淨肌骨、疎淪滌心原。 真卿

不似春醪醉、何辭綠菽繁。 昼

素瓷伝静夜、芳氣滿間軒。 士修¹⁴⁾

皎然の字は清昼であるから、ここでは「昼」と記される。清昼の次の句である結びの句は陸士修が詠っている。そこには「素瓷伝静夜、芳氣滿間軒。（白磁茶碗が夜の静けさを伝えつつ回されると、素晴らしい香りがのどかな部屋一杯に広がる）」とある。清廉な白磁茶碗の動きと夜の静寂な気配とを重ね合わせ、そこにただよう茶の香気とともに、茶事の情景が見事に表現されている。

このように、皎然が青磁の焼成が盛んであった南方に生まれ、陸羽とも親しかったが、さきにも記したように皎然の茶詩には前掲以外のものでも、青磁に関する記述が見当たらない。その論拠とまでは言えないが、皎然と白磁との関係を考えて、そこにはある一つのイメージが浮かんでくる。前掲の「飲茶歌詠崔石使君」の詩では、「素瓷雪色縹沫香、何似諸仙瓊蕊漿（雪のよくな白い茶碗に薄緑の茶の花が香る。神仙が飲むという玉の飲料のようだ）」と詠っていたし、また、「飲茶歌送鄭容」の詩では、「丹丘羽人輕玉食、採茶飲之生羽翼（丹丘の仙人は玉を服することをやめ、茶を摘んで飲んだために羽翼が生えた）」と詠っている。さらに、前掲の「飲茶歌詠崔石使君」の詩の最後で、「孰知茶道全爾真、唯有丹丘得如此（本当は茶の道こそが心のまことを完全にするのだ。丹丘子のみがその道を実践できたのだ）」とまで詠っている。いずれの詩も道教と関連しており、前掲「五言月夜啜茶聯句」で表現された白磁の茶碗が醸し出す静謐さから察すれば、道教の羽化登仙的なイメージには、白磁が最も適していたのではないかと思う。道教を理解する皎然の茶事には、白磁の茶碗こそが必須のアイテムであったのではないだろうか。それ故、皎然には白磁に対する特別の思いがあったと推測する。しかしながら、例えば水上和則氏などは「とくに寺院を中心に茶器として白瓷を用いる例が多く確認される」と述べられている。このような寺院での白磁使用の実態を踏まえて考えれば、皎然が仏教僧として茶事において白磁を使用したことは当然であると指摘される向きもあろう。そこで、当時の世間での白磁と青磁、さらには、本論である越州窯、邢州窯に対する評価については、次の「茶中雜詠」も併せて判断していくことにしたい。

皮日休は、陸羽と同じ湖北省襄陽竟陵の出身である。咸通八年（八六七）進士に合格した。蘇州刺史崔璞の幕下の時、陸龜蒙と知り合い、詩を唱和して「皮陸」と呼ばれた。以下、「茶中雜詠」の序文、及び「茶中雜詠」中の「茶甌」という詩を見ていきたい。まず、「茶中雜詠序」から記す。

案周礼、「酒正之職、弁四飲之物、其三曰漿」。又「漿人之職、共王之六飲、水、漿、醴、涼、医、醢、入于酒府」。鄭司農云、「以水和酒也」。蓋當時人率以酒醴為飲、謂乎六漿、酒之醴者也。何得姬公製爾雅云「櫝、苦茶」。即不擲而飲之。豈聖人純於用乎。草木之濟人、取捨有時也。自周已降、及于国朝茶事、竟陵子陸季疵言之詳矣。然季疵以前、称茗飲者必渾以烹之、与夫淪蔬而啜者無異也。季疵之始為經三卷、繇是分其源、制其具、教其造、設其器、命其煮、俾飲之者除瘡而去癘、雖疾医之不若也。其為利也、於人豈小哉。余始得季疵書、以為備矣。後又獲其顧渚山記二篇、其中多茶事。後又太原温從雲、武威段礪之、各補茶事十數節、並存於方冊。茶之事、繇周至于今、竟無纖遺矣。昔晉杜育有舜賦、季疵有茶歌。余欠然於懷者、謂有其具而不形於詩、亦季疵之余恨也。遂為十詠、寄天隨子。

「茶中雜詠序」には、「季疵之始為經三卷」と見える。「季疵」とは陸羽を、「經三卷」とは『茶経』を指す。「季疵之始為經三卷」以下の文を記せば、「季疵之始為經三卷、繇是分其源、制其具、教其造、設其器、命其煮、俾飲之者除瘡而去癘、雖疾医之不若也。（陸羽が『茶経』三巻を著してはじめて、茶の起源を明確にし、製茶の道具を定め、製造方法を教え、喫茶の器具を整え、煮る方法を指示したのである。その結果、茶を飲んだ人々が、糖尿病や風土病から解放された。医者の力もこれには及ばないであろう）」とある。この文から、皮日休にとっては『茶経』の内容が手堅く篤実なものであったという印象を受ける。続いて「其為利也、於人豈小哉。余始得季疵書、以為備矣。（陸羽が世を救った功績はまことに偉大である。私は陸羽の『茶経』を入手して読み、実に完備したものだと思った）」とあって、『茶経』の内容が、やはり相當に充実していたことを記している。最後に「余欠然於懷者、謂有其具而不形於詩、亦季疵之余恨也。遂為十詠、寄天隨子。（ただ私が心中不満

に思うのは、せっかくの茶の用具が、まだ詩に詠まれていないことであり、陸羽本人もさぞかし残念に思っていることだろう。そこで「茶具十詠」を作り、天随子陸龜蒙に贈るものである」とあって、「茶中雜詠」を詠んだ所以を語って、序の結びとしている。結局、「茶中雜詠」の序文からは、皮日休が陸羽の『茶経』にかなりの関心を寄せ、この書を重んじていた様子が窺える。高橋忠彦・佐藤正光・土屋裕史諸氏は、「皮日休・陸龜蒙の茶詩」の中で、「茶中雜詠」の序文は唐代の茶論としては出色であり、『茶経』を高く評価しており、その受容の歴史を知る手がかりともなる」とされる⁸⁰。

ここで注目したいのが、次に記す「茶中雜詠」中の「茶甌」という詩である。

邢客与越人、皆能造茗器。

円似月魂堕、轻如雲魄起。

棗花勢旋眼、蘋沫香沾齒。

松下時一看、支公亦如此⁸¹。

前掲の高橋氏他諸氏「皮日休・陸龜蒙の茶詩」の続文では、「実際、ここに訳出した各十種の茶詩は、概して『茶経』の影響が著しい。注で指摘したごとく、彼らの見た『茶経』が、現在の『茶経』と近いことすら想像できる⁸²と記される。「茶甌」もその一つであって、例えば三行目の「棗花勢旋眼」は『茶経・五之煮』に「如棗花漂漂然於環池之上」とあって、『茶経』の影響を受けていることを指摘される⁸³。しかしながら、「茶甌」では「邢客与越人、皆能造茗器。円似月魂堕、轻如雲魄起。（邢窯と越窯の職人達は、いずれもこの茶器を得意としている。地上に落ちた満月のように丸く、わき起こる雲のように軽い）」と詠われている。この「茶甌」の詩からわかることは、皮日休は、邢州窯と越州窯とともに高級な磁器として評価している⁸⁴という点

である。このように、皮日休の邢州窯・越州窯に対する評価も、『茶経』巻中「四之器、盃（茶碗）」で記されたような越州窯のみを優位に扱ったものではなかったことがわかる。さらに言及すれば、皮日休は官吏であり、文化的な教養を備えていた。前掲「茶中雜詠序」の内容もきちんとまとまっていたし、そこには、陸羽の『茶経』・『顧渚山記』、また以後の茶に関する書物の情報も記されており、皮日休の茶事に関する認識はきちんと整理されたものであったと思われる。そのため、「茶甌」の詩にみられた両窯に関する記述は穏当なものであると判断できるのではないか。私はこの詩から読みとることのできる邢州窯・越州窯についての評価は、当時の世間での両窯に対する評価と同じであったと考えている。

以上、本章では、陸羽と親交のあった釈皎然や『茶経』を高く評価していた皮日休の詩を引用して、越州窯と邢州窯の茶碗に関する考察を行った。釈皎然・皮日休に共通することは、まず、両人ともに『茶経』に親しんでいた点であろう。そして、両人の磁器に関する記述や評価については、釈皎然の場合は白磁に関する記述のみであって、磁器に関しては陸羽や『茶経』の影響を受けていたとは思えない。また、皮日休の場合は邢州窯と越州窯をいづれも称賛したものであった。このように、両者の記述から判断すれば、両者とも『茶経』巻中「四之器、盃（茶碗）」に記されたような越州窯に偏重した考えは、もっていなかったと思われる。

ところで、昭和三四年に小林太一郎氏は、「唐宋の白磁」（平凡社刊『陶器』全集第十二巻所収）の中で、陸羽の当時は越州窯より邢州窯の方が盛んに用いられていたのではないかという見解をすてに出されている⁸⁵。最近のものでは、小林仁氏が前掲「優雅なる白い焼き物―定窯白磁をめぐる諸問題」の中で小林太一郎氏の見解を採りあげられ、支持されている⁸⁶。また、この原稿をほぼ作成し終えたところで『東洋陶磁学会報』第八一号が手元に届き、そこには伊藤郁太郎氏の「中国における二〇一三年度陶磁研究事情」（平成

二六年度第四二回総会特別報告「世界の陶磁史研究動向」(要旨)⁸⁹という総会特別報告の要旨が掲載されていた。その3、「中国古陶磁学会2013年年会 暨南青北白—越窯与邢窯學術研討会」の中で、伊藤氏も『茶経』巻中「四之器、盃(茶碗)」の邢州窯が越州窯に劣るとみなされた三つの理由を引用された上で、「上述の比較論は、あくまで喫茶の視点から論ぜられたものであり、決して邢窯が越窯より劣ると考えられていたわけではない。邢窯は当時から、名窯として讃えられていたことは間違いない」と記されている。前掲の小林仁氏に続いて、学会報から伊藤氏の最新の見解を知り得たことは幸いであった。

このように第一章と本章における考察を併せ見れば、陸羽の『茶経』執筆当時、邢州窯の名声は高く、『茶経』の記述に見られる邢州窯が越州窯の下に甘んじていたというような状況は考えられないというのが正しい見方であろう。以上の考察から判断すれば、『茶経』巻中「四之器、盃(茶碗)」の両窯に関する評価が、かなり陸羽の個人的なものであったことが了解されたと思う。そのため、「四之器、盃(茶碗)」の引用に際しては、注意が必要である。では、なぜ陸羽は邢州窯白磁を越州窯青磁の下位に置いたのか、その理由を考えていきたい。さきに触れた小林太一郎氏の「唐宋の白磁」では、『茶経』に記された邢州窯の評価に関して、かなりの疑義が述べられていた⁹⁰。しかし、この小林太一郎氏の問題提起から、すでに半世紀以上経過している。管見の限り、『茶経』巻中「四之器、盃(茶碗)」において邢州窯白磁が越州窯青磁の下位に置かれた理由について、従来は、疑問のままか、或いは陸羽の審美的基準などから簡単に見解が述べられる程度であった。

そこで、改めて自説を述べたい。私は、この「四之器、盃(茶碗)」に記された越州窯と邢州窯の評価の差の理由を、最初、拙稿「陸羽『茶経』にみえる南方意識とその優位性」で考察した。ここでは、『茶経』の内容には南北の対比やそれに伴う評価の差異が見られるが、これらは陸羽の抱く南方意

識(造語、南方のものが北方のものに対して優れているとする自負の意識)の表れであると考えた。次いで自著『喫茶文化史研究序説』では、南方人という言葉を添えながら、この意識を「アイデンティティー」という言葉に置き換えた。現在、その意味するところは、南方で生まれ育った陸羽の強烈な自己意識や帰属意識であると考えている。私は、「アイデンティティー」という言葉を用いることによって、『茶経』の内容の理解が容易になると考えている。この言葉には、個人と地域、或いは、個人と国またはそれ以上の地域的な拡がり、それに関わる諸事象との関係性を想起させるものがあると考えるからである。具体的に記せば、陸羽は『茶経』巻上「一之源」において、伝統ある北方産の妙薬人参と当時世間で滋養物としてほとんど認識されることのない南方産の茶を、文章中で一旦両者を否定した上で巧みに対比させ、茶の効能が人参にも決して引けをとらないことを述べた⁹¹。さらに、本稿で考察している「四之器、盃(茶碗)」において、当時、北方の第一級の窯場であった邢州窯の白磁を陸羽が推奨する南方の越州窯青磁と対比させ、邢州窯を越州窯の下位に事も無げに置いている。いずれも世間の評価とはかなり隔たったものであった。これら南方の産物を優位に導き、北方の産物を貶める理由は、一重に南方人陸羽のアイデンティティーから生じたに違いない。結局、私は、自身のアイデンティティーを根源とする陸羽の南方に対する強い思いによって、邢州窯白磁が越州窯青磁の下位に置かれることになったと考えている。

第三章 『茶経』巻中「四之器、盃(茶碗)」に記された茶の色映りに関する

一見解

「四之器、盃(茶碗)」において、陸羽は、越州窯と邢州窯の茶碗に茶が注がれた際の茶の色映り(茶碗に茶が注がれて目視した際の茶の色、茶碗の釉

色を反映した茶の色)についても論じている。しかし、私は、従来の解釈では実際に注がれた茶の色(茶碗に注がれる前の茶本来の色のこと、煮だした茶の色)に関する考察が不十分なため、適切な解釈がなされていないと感じる。そこで、その点について『茶経』を改めて検討し直すことにする。(但し、本稿においては、「壽州瓷黃、茶色紫。洪州瓷褐、茶色黒」については触れない⁹⁰)。また、茶の色に関しては、煮だした茶の色のみを焦点を当て、湯の表面に浮かぶ茶の華の色も併せた考察は行わない。)

「四之器、盃(茶碗)」を見ると、陸羽は白磁である邢州窯ではなく、青磁である越州窯を茶碗として推奨していたことがわかる。陸羽がなぜ越州窯青磁を重んじたかのかという問いかけに対しては、盃・甌の釉色とそこに注がれた茶の色目とが重なることによって、目視の際に、茶の色合いが美しい緑色に映るからであるというものが大方の答えとなる。これが、一番穏当な考え方であると思われる。しかしながら、「四之器、盃(茶碗)」に記された「邢州白而茶色丹(邢州窯の磁器は白いので茶の色は丹に映る)・「邢州瓷白、茶色紅(邢州窯の磁器は白いので茶の色は紅に映る)」という記述から判断すれば、白磁である邢州窯の茶碗に映った茶の色は、「丹」・「紅」と記されることから、越州窯青磁に注がれた茶の色も赤色系統ではなかったかと考えられる。そこで生じる問題が、青磁にこの赤色系統の茶が注がれた場合、果たして茶が緑色に映るのかという問題である。但し、これは、注がれた茶の色の濃淡にもよるであろうし、さきに記した茶の色と釉色との重なり具合で、茶の赤色も青磁の釉色を映して、厳密には緑ではないが緑色とも表現できよう。このように考えると、茶がたとえ赤色系統であっても、余り問題は無いことになる。

ところが、以上の解釈にも、さらに一考すべき点がある。それは、従来の解釈が、『茶経』「四之器、盃(茶碗)」の文章に記された茶の色映りだけで判断されたものだからである。そこで、本稿では、「四之器、盃(茶碗)」か

らではなく、『茶経』の他の項の記述から陸羽が良しとする茶(後述する良茶のこと)の色を探り出し、この考察における判断材料としたい。その上で、その茶の色と「四之器、盃(茶碗)」の記述とを併せ見て、本章における結論へと導きたい。以下、『茶経』から関連箇所及び茶の色を類推できる箇所を選び出して、検討を加えたい。

まず、『茶経』巻上「三之造」を挙げたい。この箇所は、茶の製造法が記されており、そこには茶の品質に関する記述が見られるので、次にそれを記す。

茶有千萬狀、鹵莽而言。如胡人鞞者、蹙縮然(京錐文也)。……(中略一)……此皆茶之精腴。有如竹籜者、枝幹堅實、艱於蒸搗、故其形籠篔然(上离下師)。……(中略二)……此皆茶之瘠老者也⁹¹。

「三之造」では、「茶有千萬狀(できあがった固形茶には様々な形状がある)」として、良茶(「精腴」、上質で滋味にとんだもの)と粗茶(「瘠老」、瘠せて精分がなくなったもの)の形状の特徴について記している(本稿においては、以後に述べる茶の品質上の定義をこの「良茶」と「粗茶」として記すことにする)。右文に記される良茶の特徴としては胡人鞞(胡人の靴)他三例(中略一の部分)を挙げ、粗茶の特徴としては竹籜(筍の皮)他一例(中略二の部分)を挙げ、ともに比喩を巧みに用いて表現している。さらに「三之造」の末文には、「茶之否臧、存於口訣(茶の良し悪しは、人の口伝にある)」と記されるが、その前文には茶の色つや・凹凸の加減に基づいた茶の鑑定の手・下手に関する記述⁹²が載っており、これら(注90の記述)から判断した良茶・粗茶の区別は、人から人への口伝でしか伝承できないと述べていることがわかる。きちんと整った良茶を鑑定するためには、それを見分ける力量が必要となり、結局、熟練・経験がものをいうのであって、全てを書き記

することはできないというような意味合いであろう。この「三之造」の引用部分で確認したい事項は、陸羽が茶の品質の「良否（精腴と瘠老、臧と否など）」という観点をはっきりと記している点である。以上は、陸羽が良しとする茶の色を判断する際にも関係してくるものである。

また、『茶経』巻下「五之煮」では、茶の煮たて方を記し、最後に茶のもつ性質について説いている。そこで、次にそれを記す。

茶性儉。不宜廣。則其味黯澹。且如一滿盃、啜半而味寡。況其廣乎⁴⁰。

「五之煮」では、「茶性儉。不宜廣。則其味黯澹（茶の性は儉である。広に宜しくない。広では、茶の味は暗く淡い）」とある。陸羽は『茶経』巻上「一之源」において「茶之爲用、味至寒、爲飲最宜精行儉德之人（茶の効用は、味が至って寒であるから、飲料として、行いが精れ、儉の徳を有する人物に最も適している）」と記しており、この「儉」とは質素で控えめな徳を意味していて、同文に記される「精」という語句とともに『茶経』の根幹をなす重要な語でもあることがわかって⁴⁰いる。そのため、本稿では右文「五之煮」の「茶性儉（茶の性は儉である）」以下の文章には、かなり大切な事項が記されていると判断したい。以下、この観点到重きをおいて考察すれば、まず、この「茶性儉。不宜廣。則其味黯澹」からは、「儉」が「廣」と反対の概念の語句であることが理解される。そうであるならば、「一之源」の「爲飲最宜精行儉德之人」にかかわる味である「寒（本草学の気味で沈静効果を目指す）」と「五之煮」の「廣」にかかわる味である「黯澹（暗く淡い）」も互いに反対の概念の語句であることになる。このように、「五之煮」の「儉」・「廣」・「寒」・「黯澹」と前掲文『茶経』巻下「三之造」で述べられていた茶の「良否」という観点とを併せ見れば、「儉」である茶は味が「寒」で良茶（「精腴」）であると考えられ、「廣」である茶は味が「黯澹」で粗茶（「瘠老」）

であると考えられる（但し、ここでの味の意味合いは広義なものとなっている）。

続いて、前掲文「五之煮」の続文を挙げてみたい。私は、この続文を意味上は前掲文「五之煮」の「茶性儉、不宜廣。則其味黯澹。且如一滿盃。啜半而味寡。況其廣乎」から繋がる同じ一続きの段落に属していると考えている。よって、次に記す続文の「其色細也」以下も大切な記述がなされていると判断している。そこには次のようにある。

其色細也。其馨欬也。〔香至美欬。欬音使。〕其味甘、檀也。不甘而苦、殊也。啜苦咽甘、茶也。〔一本云。其味苦而不甘、檀也。甘而不苦、殊也。〕⁴¹

右文の「其色……」以下を見ていくと、なんとそこには茶の色・馨に関する記述が載っているのである。『茶経』「三之造」で煮だす前の固形茶の形状や色に関してはずでに記されているから、この「五之煮」に記される色、馨は煮だした茶に関するものであると判断できる。私は、以上、本章で行った考察からすれば、「五之煮」の「儉」から始まる件で記された茶の色こそが、陸羽が良しとする茶の色であるとみなすことができると思う。具体的には、「其色細也。其馨欬也（その色は細（浅黄色）である。その馨はよい）」と記されている。「四之器、盃（茶碗）」で挙げられた最高の碗・甌に注ぐべき茶は、まさにこの茶であろう。それは、茶の馨のきわめてよい「細色（浅黄色）」の茶であった。「四之器、盃（茶碗）」には「越瓷青而茶色緑（越州窯の磁器は青いので茶の色は緑に映る）」と記されていた。越州窯の青い釉色の茶碗に、この「細色（浅黄色）」の茶が注がれて緑色に映えたと解釈しても、「越瓷青而茶色緑」の文章と何ら矛盾しないと思われる。

しかしながら、茶の色を「細色（浅黄色）」と規定することによって、次

の展開として、またしても困難に遭遇する。仮にも同じ「細色」の茶を白磁の茶碗に注いだならば、そこに映る茶の色は茶本来の色である「細色」に近いものとなるはずで、おおよそのところ、細色系統で記述されるはずである。ところが、「四之器、盃(茶碗)」で記された邢州窯白磁の茶の色に関する二箇所の記述は、前述のように邢州の磁器は白いので茶の色は「丹」色、或いは「紅」色に映るとある。そうであるならば、理屈の上では、邢州窯白磁の茶碗に「丹」・「紅」色などの赤色系統の茶が注がれたことになる。そのため、我々は注がれた茶の色の判断にますます苦しむことになる。

それでは、なぜこのように読み手が判読に苦しむことになる茶の色の記述がなされたのであろうか。この点について、以下、考察していきたい。まず、考えられることは『茶経』が伝世される中で、文字を転写する際に書き間違いが生じた場合であるが、本稿では校勘・校訂がなされた現行のテキスト⁶⁶に典拠して考察を行っているため、今回は、この説は除外する。

そこで、この問題解決のために、『茶経』の文章の特徴を考えていきたい。この特徴は、今回、陸羽の意欲やそこから派生する概念を考える手段としても用いることにする。まず、特徴として挙げられることは、『茶経』においては「上質なものは上質なものに対応させる」、或いは「粗悪なものは粗悪なものに対応させる」というような形で、一つの文の中で同等の価値のものを適宜対応させる場合があることである。ここでいう「もの」とは、状態・状況まで含めて指している。例えば、さきに「儉」の説明で引用した「一之源」の「茶之爲用、味至寒、爲飲最宜精行儉德之人」という文は、「味至寒」の部分と「爲飲最宜精行儉德之人」の部分とが、「上質なものは上質なものに対応させる」という形に当てはまる。そして、この「一之源」の後の文に記されている人參と茶の効能に関する記述「茶爲累也、亦猶人參。……(中略)……知人參爲累、則茶累盡矣(茶がわざわざいとなるのもまた人參と同じである)……(中略)……人參でもわざわざいとなることがわかれば、茶が相当

にわざわざいとなることもわかるのである)⁶⁷などは、単純に茶の効能が人參のように優れているということとを述べずに、両者を否定して、敢えて癖のある文章技巧を用いた上で、茶の効能が人參のように優れていることを表現しているが、その中の「知人參爲累、則茶累盡矣(筆者注・累とは、わずらい)」をそのまま文字どおりに読めば、人參がわざわざいともなり得る場合と茶がわざわざいともなり得る場合を対応させて記しており、「粗悪なものは粗悪なものに対応させる」という形に当てはまる。いずれも通常よくある文の形態ではあるが、これも一つの特徴とみなしたい。

この一つの文の中で同等の価値のものを適宜対応させるという特徴は、当然、著者である陸羽の意識から生み出されているはずである。そこで、この特徴を「四之器、盃(茶碗)」で記される茶碗と茶の色映りの関係に照らして考えてみると「上質な茶碗に備わるのは自ずと良茶の色映りである」、或いは「粗悪な茶碗に備わるのは自ずと粗茶の色映りである」というような概念に至るのではないかと思う。以上の観点から「四之器、盃(茶碗)」に見られる茶の色映りに関する文章を改めて読んでいくと、まず、はじめに理解できるのが、さきに陸羽が良しとする茶の色を言及した箇所であつた「越瓷青而茶色緑」という文章であろう。この文章からは、「陸羽は越州窯青磁を第一としたから、この越州窯青磁の茶碗には良茶である「細色」の茶が注がれたはずである。その結果、茶の色が越州窯青磁の釉色を反映して緑色に見えた」というようなことが想起される。よって、「越磁青而茶色緑」は、「上質な茶碗に備わるのは自ずと良茶の色映りである」という概念に当てはまる文であると考えられる。では、もう一方の「粗悪な茶碗に備わるのは自ずと粗茶の色映りである」という概念にあてはまるのはどの文かと考えると、それは、越州窯青磁に対して劣位におかれた邢州窯白磁に関連するものであるから、一つ前の文章である「邢瓷白而茶色丹」が思い浮かぶ。「越州窯岳瓷皆青。青則益茶、茶作緑之色。邢州瓷白、茶色紅」も同様に両者に分類、

書き直しができよう。このように茶碗と茶の色映りの関係に言及した概念を「四之器、盃(茶碗)」にあてはめて判断すれば、「陸羽にとって赤色系統(「丹」・「紅」)の茶の色映りが粗茶の色映りである」という仮の結論に至る。邢州窯は白磁であるから、注がれた茶の色も赤系統であったと判断でき、陸羽は邢州窯白磁にはこの赤色系統の茶をもってした(この「陸羽は……もってした」の部分は、後ほどさらに考察する)のであって、さきに述べた「理屈の上では、邢州窯白磁の茶碗に「丹」・「紅」色などの赤系統の茶が注がれたことになる」という理屈は通ることになる。

ここで、この仮の結論をさらに補うものがある。それは、前掲文「越瓷青而茶色緑」・「邢瓷白而茶色丹」が、もともと「邢瓷白而茶色丹。越瓷青而茶色緑。邢不如越三也(邢州窯の磁器は白いので茶の色は丹く映る。越州窯の磁器は青いので茶の色は緑に映る。邢州窯の磁器が越州窯の磁器に及ばない第三の理由である)」という一連の文脈に属しているという点である。この点を確認してから、次の文章の特徴を考えてみたい。さきの検討においては、「三之造」では茶の「良否」という観点を、「五之煮」では「險」・「廣」という表現を確認した。以上から、陸羽『茶経』の文の特徴の一つとして、文中に反対の概念同士を対峙させる場合があることを挙げたい。実は、この特徴は「四之器、盃(茶碗)」にも見られる。陸羽は、「四之器、盃(茶碗)」において越州窯を優勢に扱い、邢州窯を下位に置いている。これなど、「上下」・「優劣」という類の反対の概念同士である。例えば、「或者以邢州處越州上、殊爲不然。若邢瓷類銀、越瓷類玉。邢不如越一也。若邢瓷類雪、則越瓷類水。邢不如越二也。邢瓷白而茶色丹。越瓷青而茶色緑。邢不如越三也」・「越州瓷岳瓷皆青。青則益茶、茶作緑之色。邢州瓷白、茶色紅」など、越州窯と邢州窯の優劣が文中において華々しく展開しており、まさにこの特徴そのものである。さきに「越瓷青而茶色緑」・「邢瓷白而茶色丹」が「邢瓷白而茶色丹。越瓷青而茶色緑。邢不如越三也」という一連の文脈に属しているこ

とを確認したが、この文脈も、結局、「四之器、盃(茶碗)」の越州窯と邢州窯の優劣が文中において華々しく展開している文の中にあるわけである。これより茶の色映りに関して興味深い事実がわかる。それは、越州窯と邢州窯の優劣が華々しく展開している箇所であるからこそ、ここに記される丹色とは、緑色に対して劣った茶の色映りであると見ることができるのである(前掲「邢州瓷白、茶色紅」の紅色も同様であろう)。すなわち、赤色系統(「丹」・「紅」)の色映りが、緑色に対して劣っていると見えよう。

越州窯青磁の茶碗の釉色に映えた緑色の茶とは、良茶で「細色(浅黄色)」の茶がベースであるという理解は容易であろう。理解しにくいのは、邢州窯白磁の茶碗の釉色に映えた赤色系統の茶である。それは、粗茶であって、白磁に注いだのであるから同じく赤色系統の茶がベースとなったと思われる。陸羽の記したこれら赤色系統の茶について一考すれば、それは、より劣った品質の茶や陸羽が良しとしたものとは異なる製法で作られた茶、或いは管理上の不具合等で劣化したような茶を用いた際の色目であったのではないだろうか。そのため、陸羽が良茶であるとみなしている茶から煮だした「細色(浅黄色)」の色目とはかなり異なっていたと考えられ、煮だすと、例えば明るい褐色程度の色目になったのではないかと想像している。結局、文の特徴を捉えながら茶碗と茶の色映りの関係に言及した概念を「四之器、盃(茶碗)」にあてはめた上で、「邢瓷白而茶色丹」・「越瓷青而茶色緑」が優劣を戦わしている一連の文脈に属しているということも考え併せて考察した結果、私は、陸羽にとって赤色系統(「丹」・「紅」)の茶の色映りは、粗茶の色に他ならないと結論付けたい。まず、この赤色系統(「丹」・「紅」)が粗茶の色、或いは色映りであるという事実を知ることが、「四之器、盃(茶碗)」の判読を容易にすることであると私は考える。

さて、さきに「陸羽は邢州窯白磁にはこの赤色系統の茶をもってした」の部分は、後ほどさらに考察するとした。実は、この「もってした」の内容は

二つ考えられ、その内容の検討が本章における最終の課題となるからである。そのため、「四之器、盃(茶碗)」で邢州窯白磁に注がれた茶の色が赤色系統(「丹・紅」)で記されたということについて、もう少し検討する必要がある。まず、考えられるのは、邢州窯、越州窯ともに同じ「細色」の茶が注がれたとされる場合であろう。しかしながら、たとえ邢州窯白磁に注がれた茶が、性は「儉」で味は「寒」で品質は「精腴」で色は「細」である良茶であったとしても、陸羽の記述に見られる邢州窯の茶の色映りは常に赤色系統であるから、性は「廣」で味は「黯澹」で品質は「瘠老」で色は「赤色系統(「丹・紅」)」である粗茶を注いだ際の色映りで表記されたことになる。次に考えられるのは、陸羽には、最初から良質の茶が邢州窯白磁の茶碗に注がれるという考え自体が無かったという場合である。その際は、邢州窯白磁の茶碗に注がれた茶は、至極当然であるが、粗茶を用いているから、その色映りは赤色系統を呈するわけである。いずれにしても、私は、茶碗が陸羽にとって粗悪であれば、そこに注がれる茶の色映りが「細色」をベースとした緑色で記されることなど到底あり得なかったと考えている。そのため、邢州窯白磁の茶の色映りは、すべて「丹・紅」色などの赤色系統で記されたのだと思う。このあたりの発想の転換が読み手には困難であって、それがなされないために、十分に『茶経』巻中「四之器、盃(茶碗)」の内容を把握しきれないのではなからうか。一見、この考え方は荒唐無稽にも感じられるかもしれない。しかしながら、陸羽の自伝であるといわれる『陸文学自伝』には、陸羽が非常に高潔な志の持ち主であったことが理解される反面、かなり独自性の強い一面も強調されていたこと¹⁾を思い出す。このように見ていくと、私は『茶経』の記述の中には、陸羽独特の論法も存在していたのではないかと考える。その典型が、この『茶経』巻中「四之器、盃(茶碗)」なのではないだろうか。結局、私は『茶経』の中では、粗悪な茶碗と上質な茶の色映りとは、一文を構成するにあたって両立し得ない概念であったと見ている。すな

わち、このような陸羽独特の考え方により、一見矛盾しているのではないかと思われるような茶の色映りに関する記述が『茶経』巻中「四之器、盃(茶碗)」に記されることになったと私は考えている。

以上述べたことは、あくまで「陸羽にとって、粗悪な茶碗に注がれた茶がたとえ良茶であったとしても良茶として表現されることはない。或いは、粗悪な茶碗に良茶が注がれるということ自体あり得ない」という私の仮説から出発したものである。しかしながら、一つの考え方としてはありえると思う。このように考えると、『茶経』「四之器、盃(茶碗)」の茶の色映りに関する問題点も解決可能となる。そのため、敢えて本章において言及することにした。但し、これもあくまで一つの推論に過ぎないと言う点も重ねて申し添えたい。

付論 茶神に注いだもの

私は、「喫茶の起源と茶の流通における一考察」や『喫茶文化史研究序説』において、『唐国史補』巻中「陸羽得姓氏」に記載された陸羽にまつわる慣習と当時行われていた仏教の灌仏会との関連性を推測し、陸羽が茶神として祭られていたのではないかとこのことを述べた。この慣習とは、鞆島の陶工は人形を多く造ったが、そのなかに陸鴻漸(陸羽)と名づけられた人形があり、それは茶器(茶碗)のおまけとしてつけられ、商家ではその人形を祭って、茶の利益があがらない時には、すぐに何かを注いで拜んだというものである。今回、内容は若干異なるが茶神という語句と陸羽人形に注いだものが記述されている史料があるので、前掲拙稿及び自著に対する補足を行いたい。なお、前回の陸羽人形に関する記事を発表後、二〇一三年に神野恵氏が、河内省鞆義市白河窯跡に関する論考の中で新たに「小型瓷偶」というカテゴリーを設けられ、拙稿・自著で論じた陸羽人形もその一例として挙げられた

ことも付け加えておきたい⁸⁸⁾。神野氏はこの論考の中で、陸羽像の可能性があるモチーフをいくつか示されている⁸⁹⁾が、いずれ研究が進めば、陸羽の茶神像が確定されるかもしれない。今後の河南省鞏義市鞏義窯跡（総称）の発掘の進展に期待したい。

前回提示した史料は、李肇『唐国史補』巻中「陸羽得姓氏」であったが、そこには、次のようであった。

羽有文學。多意思、恥一物不盡其妙、茶術尤著。鞏縣陶者多為甃偶人、號陸鴻漸、買數十茶器得一鴻漸。市人沽茗不利、輒灌注之⁹⁰⁾。

また、今回の史料としては、唐の武徳（六一八～二六）から元和（八〇六～二〇）までの間の雑事・名人の軼事を記した撰者不詳『大唐伝載』を挙げたい。そこには、次のようにある。

陸鴻漸嗜茶、撰茶経三卷、行於代。常見鬻茶郎、燒瓦甃爲其形貌、置於甃釜上左右爲茶神、有交易則茶祭之、無則以釜湯沃之⁹¹⁾。

『大唐伝載』では、前掲の『唐国史補』と異なり、「鞏縣陶工云々……」というような人形の生産・入手に関するより具体的な記述はないが、茶を商う店では、陸羽をかたどった人形を焼いて、甃の上の左右において茶神としたことが記されている。前掲の拙稿や自著においては、仏教の灌仏会と絡めて、祭られた人形は茶神として崇められたのではないだろうかと考えたが、『大唐伝載』の記述では具体的に茶神として記されており、この考えは正しかったと思われる。さらに、この史料では、甃上の左右に茶神兩柱を祭っていたことが具体的に記されており、祭り方を考察する上でも大変興味深い。また、『唐国史補』では、「市人沽茗不利、輒灌注之（商人は茶の商の利益があら

ないと、すぐに、この人形に注いだ）」とのみ記され、茶神とした陸羽人形に何を注いだのかまではよくわからなかった。そのため、拙稿・自著ではとりあえず水を注いだと訳し、実際は何らかの液体を注いだことを本文で注記するにとどまった⁹²⁾。『大唐伝載』では、交易があれば茶を供えて茶神（陸羽人形）を祭り、交易が無ければ釜の湯を茶神（陸羽人形）に注いだと記されている。この記述からすれば、『唐国史補』に記載された陸羽人形に注いだものも、釜の湯であった可能性がある。

おわりに

『茶経』巻中「四之器、盃（茶碗）」で見られる問題点の一つは、邢州窯と越州窯の評価の差に関するものである。これについては、第一・二章において、近年の研究者の成果を併せて改めて自説に導いた。また、「四之器、盃（茶碗）」で見られる別の問題点は、茶の色映りに関するものである。これについては、第三章において従来とは異なる観点から考察を行った。結果、茶の色映りに関しては、文字通りに読んでも理解しづらいため、陸羽の意識・書き振りを十分に認識した上で解釈する必要があるということがわかったと思う。このように本稿の第一～三章で考察を行った結果、従来に比べて『茶経』「四之器、盃（茶碗）」をより柔軟に解釈することができるようになったのではないかと考える。また、今回は付論を補った。拙稿「喫茶の起源と茶の流通における一考察」・自著『喫茶文化史研究序説』において『唐国史補』を引用したが、そこにはなかった記述が『大唐伝載』に見られたからである。『大唐伝載』には、陸羽人形が「茶神」として記され、また、陸羽人形に注いだものは釜の湯であると記されていた。いずれも前掲拙稿・自著の内容を補う史料であるため、陸羽関連事項として改めて付した。ここに諸先学のご教示を仰ぎたいと考える次第である。

- (注)
- (1) 拙稿「陸羽『茶経』にみえる南方意識とその優位性」(『近畿大学短大論集』第三六巻第一号、近畿大学短期大学部、二〇〇三年)。
- (2) 自著『喫茶文化史研究序説』(晃洋書房、二〇一二年、七七〜七九頁)。
- (3) 河北省邢台市文物管理处編著、石从枝・李军・李恩玮・王睿主编『邢台隋代邢窯』(科学出版社、二〇〇六年)。
- (4) 千年邢窯編輯委員会編、赵庆钢・张志忠主编『千年邢窯』(文物出版社、二〇〇七年)。
- (5) 小林仁「優雅なる白い焼き物―定窯白磁をめぐる諸問題」(『定窯』、編集大阪府立東洋陶磁美術館、二〇一三年)。
- (6) 拙稿「喫茶の起源と茶の流通に関する一考察」(『生駒経済論叢』第七巻第一号、近畿大学経済学会、二〇〇九年)。
- (7) 布目潮瀧『茶経詳解』(淡交社、二〇〇一年、巻中「四之器」罌。本稿では、布目潮瀧氏『茶経詳解』をテキストとして使用する。但し、句読点に関しては、筆者の判断で句点・読点の箇所を一部変更した。また、便宜上、「四之器」罌を、本稿では「四之器、罌(茶碗)」と表記する。
- (8) 本稿では、「越州瓷岳瓷皆青。青則益茶、茶作緑之色」とした。布目氏の注(7)のテキストでは、「越州瓷岳瓷皆青。青則益茶、茶作白紅之色」と校訂がなされている。注(7)のテキストのこの個所の校訂は従来からよく見かけるものである。私が本稿において、この個所の「白紅」を「緑」としたのは、高橋忠彦氏の研究に拠っている。高橋氏は、「白紅」が「緑」の誤りであることは明らかであると言われる。その理由として「緑」の草書・異体字を考慮する必要性を挙げられる(「緑」と「白紅」、『茶の湯文化学会会報』No.三二、茶の湯文化学会、二〇〇一年、一〜二頁)。私は、二〇一二年の自著『喫茶文化史研究序説』(注②、六二頁)から、高橋氏の「緑(緑)」という解釈を用いている。そのため、本稿では注(7)のテキストに見られる「白紅」ではなく、「緑」と記すことにする。なお高橋氏は、『茶経』本文の再検討(『東京学芸大学紀要』人文社会科学系Ⅰ、第六一巻、二〇一〇年、二〇四頁)において、「この個所については、すでに何回か卑見を述べたところである。要点を述べると、ここは浙江越州窯と湖南岳州窯の「甌」(半升弱の容量の茶碗)は青磁なので、茶が美しい緑色に見える」と述べているはずである。上文の「越瓷青而茶色緑」が参考になる。したがって積大典の説に従って「白紅」は「緑」の誤記と見るべきである。その際、「緑」を誤って二字に分離し、右上が「白」、残りの部分を「紅」に誤ったという推測が成り立つ」と述べられている。
- (9) 亀井明德「越州窯と龍泉窯」(『東洋陶磁史』、東洋陶磁学会、二〇〇二年、五八頁参

- 照)。
- (10) 尾崎雄二郎他『中国文化史大事典』(大修館書店、二〇一三年、五六頁)。今井敦解説の「越州窯」の項参照。
- (11) 注(3)『邢台隋代邢窯』五頁に「邢窯創燒于北朝、历隋、初唐的发展、至盛唐时期达到鼎盛阶段。唐末五代走向衰敗。邢窯以燒制精品細白瓷為品牌产品、成为我国隋唐时期北方的重要窑場之一」とある。
- (12) 注(4)『千年邢窯』八頁に「邢窯白瓷的燒制成功、結束了自商周以來青瓷一統天下的局面、形成了我国陶瓷史上「南青北白」争奇斗妍的两大体系。邢窯的燒造历史北齐、隋代、唐代至五代、宋、金、元、代代传承、源远流长」とある。但し、「邢窯的燒造历史……」以下の文は、重複を避けるため、本文において訳を載せていない。
- (13) 小林仁氏は、「中国陶磁史を振り返ると、白磁と青磁は二大系譜が中心となって展開してきたことが分かる。とくに、隋唐五代では、いわゆる「南青北白」と呼ばれる、南の青磁に対して北の白磁という形勢が生まれた。ここでいう南の青磁とは越窯、そして北の白磁とは邢窯と定窯を指すことはいままでもない。」とされる(注⑤、二二四頁)。定州窯の沿革も視野に入れると、この「南青北白」に該当する北の白磁の窯場は、小林氏の言われるようになると思われる。
- (14) 『新唐書』卷三十九 志第二十九 地理三。(中華書局、一九七五年)。
- (15) 邢州は七四二年〜五八八年(天寶元年〜至元三年)の間、鉅鹿郡であった。(鈴木哲雄『中国主要地名辞典』、山喜房、二〇〇三年、一六〇頁)。また、窯址のある内邱県については「唐、武徳初(六一八年)、また青山県を分置し、みな邢州に属せしめ……」とある(鈴木前掲書、五二九頁)。
- (16) 『唐国史補』卷之下(『百部叢書集成』学津討原)。
- (17) 高橋忠彦・佐藤正光・蘇明明「積皎然の茶詩」(『唐宋茶詩訳註①』、『茶の湯文化学会』第二二号、茶の湯文化学会、二〇〇六年、八八〜八九頁)。解説参照。
- (18) 注(1)に同じ。I 13。なお、本稿においては、注(1)の高橋忠彦氏他諸氏「積皎然の茶詩」(『唐宋茶詩訳註①』)及び注(1)の高橋忠彦氏他諸氏「皮日休・陸龜蒙の茶詩」(『唐宋茶詩訳註④』)をテキストとして使用し、詩・聯句・序の日本語訳も高橋氏他諸氏の訳に拠った。
- (19) 注(1)に同じ。高橋氏他諸氏は、「白い陶器の茶碗」と訳出された(二〇九頁)が、私は「白磁の茶碗」とした。
- (20) 注(1)に同じ。九〇頁。
- (21) 注(1)に同じ。II 3。
- (22) 注(1)に同じ。I 14。

- 23 なお、注22の詩（I 14）には「雲（一作雪）山童子調金鑪、楚人茶経虚得名」とあって、陸羽の『茶経』についても記されている。
- 24 ここで「丹丘」について一言触れれば、高橋氏は、「丹丘」は、唐詩によく用いられるが、それは仙人の住む理想郷としてであり、茶とむすびつけるのは皎然ただ一人である（注17、九〇頁）と言われる。
- 25 水上和則『茶文化史にそった中国茶碗の考古学』（勉誠出版、二〇〇九年、六一頁）。
- 26 尾崎雄二郎他『中国文化史大事典』（大修館書店、二〇一三年、一〇三八頁）。山本敏雄解説の「皮日休」の項参照。
- 27 高橋忠彦・佐藤正光・土屋裕史「皮日休・陸亀蒙の茶詩」（『唐宋茶詩訳注④』（『茶の湯文化学』第一六号、茶の湯文化学会、二〇〇九年）。I 1。
- 28 注27に同じ。五九頁。
- 29 注27に同じ。I 10。
- 30 注27に同じ。五九頁。
- 31 注27に同じ。高橋氏他諸氏は、「茶甌」の語釈において『茶経・五之煮』に「如棗花漂漂然於環池之上」とある」と記される。七四頁。
- 32 布目潮風氏は「皮日休の『茶中雜詠』について」（『中村治兵衛先生古稀記念東洋史論叢』、刀水書房、一九八六年、三八八頁）の中で、「茶中雜詠」の特色を列挙されたが、その一つに「陸羽の『茶経』四之器では、盃について越磁（青磁）が邢磁（白磁）よりすぐれている点を三点挙げたが、皮日休は、越磁と邢磁を対等に考えている」と記される。『茶経』巻中「四之器、盃（茶碗）」と、この「茶甌」の詩を比較した場合、諸氏のいずれの見解も同様なものとなる。
- 33 小林太一郎『唐宋の白瓷』（『小林太一郎著作集』第八卷、淡交社、一九七四年、九一頁）。初出は『陶器全集』第一二卷（平凡社、一九五九年）。
- 34 注25に同じ。二二五頁。小林仁氏は「これはすでに指摘（筆者注…小林市太郎氏の注23）のものを指す）があるように明らかに越窯青磁偏重の意図的なものである。言い換えれば、当時、すでに邢窯白磁が越窯青磁よりも圧倒的に優位な状況にあったことがこのことから逆にうかがえるのである」とされる。
- 35 伊藤郁太郎「中国における二〇一三年度当時研究事情」（平成二六年度第四二回総会特別報告「世界の陶磁史研究動向」（要旨）」（『東洋陶磁学会会報』第八一号、東洋陶磁学会、二〇一四年）。
- 36 注25に同じ。注25の記事の中で、伊藤氏は、さらに近年の邢州窯の一九八一〜九一、二〇〇三、二〇一二年の発掘報告を踏まえられて「このように、三回にわたる発掘調査の結果、邢窯についての概況が判明して研究の基礎が固まった。今後はそれを整理
- 37 分析する段階に入ることになる」と記される。
- 38 注23に同じ。九一〜九二頁。小林太一郎氏は、陸羽『茶経』巻中「四之器、盃（茶碗）」を挙げて「……と言って、つとめて邢州の白瓷をけなしている。それを茶盃の最下位において、越州青瓷を最上としているが、これは明らかに偏頗な議論である。彼がそんなに口をきわめて邢瓷をそしり、越瓷をほめるのに一生懸命になっているのは、いささかおかしい。それには理由がなければならぬ。その理由はおそらく次のようであろう。すなわちじっさいには、そのころ邢州白瓷の茶盃がもっともひろく盛におこなわれていて、越州の茶盃は未だそんなに流行していなかった。しかし陸羽はどうしても越州茶盃を首位に流行させようと欲して、そのためにわざと、当時第一とされた邢州茶盃をさんざんにこきおろしたものとと思われる。そうでなければ、彼がなぜこんなにむきになって、邢瓷をけなすのかがわからない。」と記された。小林氏は、続いて本稿第一章で引用した『唐国史補』の記載を挙げ、邢州窯が最も流行っていた点として「そのころはなんとしても邢州の内邱の白瓷の茶盃がもっとも流行っていたので、白瓷の第一なるその邢瓷を徹底的に非難することによって、ひいてその他のあらゆる白瓷茶盃をも、陸羽は言をもちいずしておとしめることができたのである。そして彼がなぜこんなに白瓷を敵視するかといえば、それはくり返していうように越州青瓷をもちあげるためであった。……かりに百歩をゆずって彼のいうとおりそのころの茶には青瓷がもっともよかったとしても、しかし白瓷もまたそれに劣らずよかったことは、何よりもその流行——『唐国史補』の記事と、陸羽の烈しい攻撃との示すその流行がよく証明している。どうも陸羽のこの議論は公平を缺くようで、何か為にするところがあるらしくおもわれる。……もっともこれは想像にすぎぬが、とにかく『茶経』の名高い茶盃の品評のこの議論は、たしかにそのままにうけとりにくい感がある」と記された。
- 39 注27に同じ。巻上「一之源」に「採不時、造不精、雜以卉莽、飲之成疾。茶爲累也、亦猶人參。上者生上黨、中者生百濟・新羅、下者生高麗。有生澤州・易州・幽州・檀州者、爲藥無効。況非此者、設服薺苳、使六疾不瘳。知人參爲累、則茶累盡矣」とある。人參と茶を否定した文章の詳細については、第三章を参照されたい。
- 40 『茶経』巻中「四之器、盃（茶碗）」に見える「壽州瓷黃、茶色紫。洪州瓷褐、茶色黑」については本稿で触れない。陸羽には壽州・洪州両窯を、北方の名窯である邢州窯のようにライバル視して徹底的に攻勢にでなければならぬとする理由が無いと思われるので、第三章で考察する陸羽の論法をこの両窯に当てはめる必要はないと考えるからである。
- 41 注27に同じ。巻上「三之造」。（中略一）の部分には、「犂牛臆者、廉襜然。浮雲出山

- 者、輪困然。輕颺拂水者、涵澹然。有如陶家之子、羅膏土以水澄泚之〔謂澄泥也〕。又如新治地者、遇暴雨流潦之所經」とある。(中略二)の部分には、「有如霜荷者、莖葉凋沮、易其狀貌。故厥狀委萃然」とある。
- (41) 注(7)に同じ。卷上「三之造」。前文には「或以光黑平正嘉者、斯鑿之下也。以黻黃坳埵言佳者、鑿之次也。若皆言嘉及皆言不嘉者、鑿之上也。何者、出膏者光、含膏者黻、宿製者則黑、日成者則黃。蒸壓則平正。縱之則坳埵。此茶與草木葉一也」と記される。注(7)に同じ。卷下「五之煮」。また沈冬梅氏の校注では、「茶性儉、不宜廣、廣則其味黯澹」と記し、「則其味黯澹」の前に「廣」の文字を補われている。校記①に「廣…原脫、今據王圻《稗史彙編》本補」と見える。(沈冬梅、『茶經校注』、中国农业出版社、二〇〇六年、三六頁・三七頁)。適切な校勘・校訂であろう。
- (42) 注(2)に同じ。三五―三六頁。布目氏も注(7)の卷下「五之煮」まとめ(一五五頁)において「茶の性は儉」には、「一之源」の「茶は精行儉徳の人に宜し」とならんで、『茶經』の茶の精神の表現も含意されているとみたい」と記されている。
- (43) 注(7)に同じ。卷下「五之煮」。
- (44) 注(7)に同じ。卷上「一之源」。茶と人參に関する全文は、注(8)に記載。
- (45) 注(7)参照。
- (46) 注(7)に同じ。卷上「一之源」。茶と人參に関する全文は、注(8)に記載。
- (47) 注(2)に同じ。三七―四四頁。
- (48) 神野恵「唐三彩の小型瓷偶」(『河南省鞏義市白河窯跡の発掘調査概報』奈良文化財研究所、二〇一三年、六九頁)。神野氏は、「唐三彩の小型瓷偶」において、唐三彩の瓷製の形象は大きく二種類「俑」と「五センチ前後の小型品」に大別できるとされる。以下、神野氏の論文から抜粋すれば「本稿では後者(筆者注…五センチ前後の小型品)を指す用語として「小型瓷偶」を用いる。「小型俑」とした場合、「俑」の字が副葬品を指すことや明器の小型俑との区別が難しくなることと、「玩具」とした場合は用途を前提とした呼称になってしまったためである。「瓷偶」の語は、後述する『唐国史補』の陸羽に関する記述から借りたことを付言しておく。」と記される。また、本文中の拙稿・自著とは、それぞれ注(1)・(2)を参照のこと。
- (49) 注(48)に同じ。七十一頁。
- (50) 田中美佐・大原良通『封氏聞見記』及び『唐国史補』に見える陸羽資料の訳注と解説」(『近畿大学短大論集』第四〇巻第一号、近畿大学短期大学部、二〇〇七年)をテキストとした。
- (51) 『大唐伝載』(『叢書集成初編』中華書局、一九九一年)。
- (52) 注(1)に同じ。また、注(2)に同じ(七八頁)。